

## 2011 PKETA International Conference 参加報告

島谷 浩 (熊本大学)・伊藤彰浩 (西南学院大学)

2011 PKETA International Conference は9月23日から24日に、釜山市の釜山外国語大学校(Pusan University of Foreign Studies)で開催された。9月22日の夕方に福岡国際空港を発ち、30分の飛行時間を経て、釜山国際空港に到着した。すでにPKETAの2名の先生が迎えに来られていた。あとでわかったことだが、招聘研究発表者だけではなく、海外からの発表者すべてに迎えを用意されたようだ。国際大会を標榜しているためか、外国人発表者への歓迎ぶりが感じられた。空港から、タクシーで約40分移動し、釜山の海岸に位置する Hotel Homers に案内された。ホテルがある広安里のビーチの景色は素晴らしく、特に窓から見える広安大橋の夜景は格別であった。

9月23日の午後から Seminar が開催された。午後1時30分にホテルからバスが用意され、釜山外国語大学校まで移動した。釜山外国語大学校は小高い山の上にある大学で、Seminar は中腹の講堂で開催された。この Seminar は Plenary Speaker として招聘されている3名の先生方 (Phil Benson 先生 (Hong Kong Institute of Education), Leo van Lier 先生 (Monterey Institute of International Studies), Marguerite Ann Snow 先生 (California State University))が、翌日の基調講演に先立って発表予定の内容を一部紹介するセッションとして位置づけられていた。Benson 先生は学習者の自律性、van Lier 先生は生態学的な知見から観た文法 (Green Grammar)指導、Snow 先生はネット環境を利用した英語指導法について概要を説明された。セミナーの参加者は150名程度だったと報告されていたが、これは予想の倍近い参加者数だったそうである。

午後5時半から Hotel Homers で懇親会が催された。この懇親会には、海外からの発表者、関連学会の代表、PKETAの役員の先生方が参加するもので、PKETA会長の Hoo-Dong Kang 先生 (Chinju National University of Education) は参加者を一人ひとり紹介してくださり、招聘研究発表者には記念品が贈呈された。招聘研究発表者は、基調講演者3名と我々以外には、ベトナムの Tran Thi Ngoc Lien 先生(Haiphong Private University)とフィリピンの Perlita Basa 先生(Schools Division Superintendent Department of Education Division of Zambales)と Elizabeth T. Manado 先生(Regional Language Centre Alumni Association of the Philippines)であった。日本からの発表者は我々以外に4名おられた。青山学院大学の瀧本将弘先生、甲南大学の Eric Gondree 先生、神田外国語大学の Katherine Thornton 先生と Tanya McCarthy 先生で、日本からも研究発表が可能なようなので、これから多くの方が発表されるとよいと思う。

学会2日目のプログラムは、午前中に開会行事と基調講演2件、午後に基調講演1件、特別講演4件、自由研究発表43件であった。今年度の大会テーマは、New Directions for Teaching English: Promoting Learner Autonomy and Authenticity for Global Communication で、自由研究発表は次の9つのセッションに分かれていた。1) Learner Autonomy, 2) Autonomous Teaching and Learning, 3) Teacher Development 1, 4) Teacher Development 2, 5) Teaching Methodology, 6) Teaching Pedagogy, 7) Second

Language Acquisition /Evaluation 1, 8) Second Language Acquisition /Evaluation 2,  
9) National English Ability Test.

我々の研究発表は、午後 1 時から Room F201 で行われた。発表タイトルは、An investigation into person misfit and ability measures of English proficiency tests で、ラッシュモデルを利用したテストデータの分析結果においてミスフィット項目として判断されたテスト項目の性質を検討し、さらにミスフィット項目が受験者能力パラメータに与える影響を考察する内容であった。この発表は TOEIC®事務局からの助成金によって実施してきた共同研究の成果の一部であるが、韓国の英語教育関係者の反応が楽しみであった。発表時間になっても、司会者が現れないハプニングもあったが、与えられた 30 分の時間をフルに活用でき、コンピュータ、プロジェクターの作動も問題なかった。聴衆は 15 名ほどで、いくつかの質問をいただいた。Mae-Ran Park 先生 (Pukyong National University) は、日本人の上級レベルの学生でもアジアの聞きなれない固有名詞のために、リスニング問題で間違いが多くなったことについての対処法について助言をいただいた。この助言は発表内容を論文化する際に重要な視点を提供してくれた。

帰りの際に、次期 PKETA 会長の Sang-Ho Han 先生(Gyeongju University)をはじめ関係の先生方に挨拶をして、釜山国際空港に向かった。学会終了後の 25 日にはエクスカッションが催されることになっていたが、残念ながら参加はかなわなかった。

2011 PKETA International Conference に参加して感じたことは、大規模な学会ではなくとも国際色豊かな学会を作り上げようとするエネルギーであった。2 日間の大会参加者総数がどのくらいかははっきりしないが、おそらく 1 日目 150 名程度、2 日目 250 名程度ではなかったかと思う。大会プロシーディングも立派で、発表のほとんどが英語でなされていたことが驚きであった。島谷は 2000 年 2 月に韓国ヨンナム英語教育学会冬季大会で研究発表をしたことがあるが、当時は英語での発表は少なく、発表要綱もハングル文字で書かれたものが多かった。

大会全体の発表件数は、セミナー 3 件、基調講演 3 件、特別講演 4 件、自由研究発表 43 件であった。自由研究発表は、9 会場に分かれて行われたが、発表間に移動のための時間がなく、やや窮屈な印象を持った。今年から学会が 2 日間になったそうだが、今後のますますの発展を期待したい。

このたび JACET から 2011 PKETA International Conference に派遣していただき、貴重な経験を積むことができた。このような機会をくださった JACET 関係者の皆様への感謝の気持ちを忘れずに、今後も研究と教育に励んでいきたいと考えている。